

いま全道各地の河川では、川を活かした学習活動やまちづくり活動などさまざまな分野で、行政とも連携しながら多くの市民団体が活動しています。地域でこうした活動を実践している方々に、「川と人づくり、まちづくり」をテーマにお話していただき、これからの川づくりにつなげていきます。

天塩川の危機管理体制づくり



井上 幸人氏

NPO法人天塩川リバーネット21事務局長

インタビュー

真砂 徳子氏

フリーアナウンサー

天塩川リバーネット21の設立

真砂 NPO法人「天塩川リバーネット21」は、河川愛護や環境保全などの活動だけでなく、天塩川の防水訓練に参画、カヌーによる現場パトロールを実施し、また防水研修会を開催するなど、防水活動にも積極的に参加されています。

井上さんは、天塩川リバーネットの置かれているNPO法人「なよろ観光まちづくり協会」の事務局長でもあります。活動を始められたきっかけはどんなことだったのでしょうか。

井上 なよろ観光まちづくり協会の活動からです。協会は、名寄市の観光とまちづくりを民間の活力でやろうということで、平成13年にNPOの法人格を取得し、もともといた名寄市の観光担当者2人分の人件費を委託されて、名寄商工会館内に事務所を開き、名寄市の観光全般を担当して活動を続けていました。

真砂 行政任せでなく、民間の知恵と力で観光を発信していこうということですか。

井上 そうです。今年は5年目になります。直接観光やイベントに携わる中で、当然、天塩川の河川敷もイベントに使いますから、河川事務所の方

ともお付き合いさせてもらい、私自身も川にかかわるようになりました。

当初は天塩川を名寄市の観光に活用するという発想でのかかわりでしたが、同時に、水に親しみ遊ぶということだけでなく、川に何か恩返しをできることはないかという思いも出てきました。そこに、たまたま河川事務所から他の地域のNPO法人の紹介があったときから、一緒に考えたのがきっかけになっています。

真砂 名寄の魅力を発信する素材として天塩川に目をつけたのですね。

井上 そうです。もともと名寄市では「アクアプロジェクト」という経済界の人が中心となった民間レベルの組織が、河川愛護や川に関する啓蒙活動をしていました。でも、私たちが日ごろ河川を利用しています。特に、河川敷のサッカー場や野球場、パークゴルフ場の利用者も河川に関する清掃活動や防災の情報収集ができるのではないかと、ということで、「天塩川流域の自然と人間が調和した魅力あふれる地域づくり」を目指し、いろんな人間にかかわってもらうためのネットワークの柱として、平成16年1月に「天塩川リバーネット

21」を設立し、同年5月にNPO法人の認証を受けました。

広域な観光を行う道北観光連盟も観光まちづくり協会の事務局にありますので、天塩川リバーネットも広域的に活動できるように天塩川流域の各市町村にお願いして、それぞれ支部という形で天塩川リバーネットの会員を募り、8市町村*¹で400人のメンバーが活動をしています。

真砂 8市町村をまとめていくのは、大変ではないですか。天塩川には既にそういう基礎があったのですか。

井上 基礎があったとはいえません。天塩川リバーネットは、みんなが自由にかかわることが基本で、押しつけるつもりはなく、自ら川にかかわってもらう取り組みですから、できることをやってもらうということです。うまく活動できている感じはしますが、地域が広いですからやはり連絡調整や意思疎通をはかるのが大変難しいです。2年目ですから、解決していくのはこれからと思っています。

人任せじゃおられん！が地域の力

真砂 井上さんは、なよろ観光まちづくり協会の事務局長としてこのお仕事をされる前はどちらにおられたのですか。

井上 私は名寄生まれです。東京の大学を卒業、名寄に戻って商工会議所の職員になりました。今は派遣されています。

真砂 地元に戻られる動機はなんでしたか。

井上 なれ親しんだ地域がいいというのと、北海道は自然が豊かで、ゆっくりしていて、それと逆の世界の「東京はあまり好きでないな」と思ったことでしょうか。北海道に帰ってきたい気持ちで、働き口を探して、たまたま第1希望の名寄に就職口がありました。

真砂 観光にかかわりたいという希望もあったのですか。

井上 その希望もありました。観光をやりながら自分の仲間、携わる人が増えることが魅力ですね。

真砂 地域の魅力を発信しようという人たちが周りに増えるということですか。

井上 発信というよりも、地元のまちづくりをする気持ちの強い人が多くて、地域として何かやろうという人の集まりに後押しされて携わりま

した。

真砂 地元のまちづくりで井上さんが感化されるような方々とはどんな方たちですか。

井上 地域にかかわること、自分の好きなことをやるときの若い人のエネルギーはすごいですね。小さいまちだから、何かイベントをやるにも、業者に払うだけの資金はありませんから、地域のことは地域の人間が支えて頑張らないとできません。祭り事はそういう人間の気持ちの歴史ですね。

真砂 人任せじゃおられん、みたいなところ。

井上 天塩川の活動もその精神を育んでいけば、きっと継続して残っていくと思います。

観光まちづくり協会の組織ができ、市がやっていた仕事も引き受け、いろいろな人たちと一緒に仕事をしました。お互いの立場からくる感覚の違いや不安もありましたが、結局はわかりあえて、気持ちよく一緒にできるようになりました。そのプロセスにはすごく感動させられました。

天塩川クリーンアップ大作戦



真砂 天塩川リバーネットの活動で特に目を引くのは河川愛護活動と防災対策への取り組みですが、どのようなことをさ

れているのですか。

井上 日ごろの活動では、河川事務所と連携協力しながら、河川の愛護月間の「川の日」には街頭で啓蒙活動、7月の初めには「天塩川クリーンアップ大作戦」を行います。住民がみんなで集まって、ごみ拾いや水質調査、河川の遊具の安全利用点検などを楽しくやっています。

真砂 どのくらいの方が参加されるのですか。

井上 上流部の和寒町から下流部の中川町まで8市町村で昨年は約1,000人、今年も同じぐらいです。主に河川敷のごみ拾いですが、みんながちょこちょこ取っても膨大な量になります。

天塩川水防公開演習と災害への心構えづくり

井上 災害に対する備えでは、一昨年（平成16年）の「天塩川水防公開演習」に参加して、住宅の浸水防止訓練を実際に体験しました。また、今年は2年目になりますが、水防研修会も開催しています。自由参加の防災の勉強会です。この地域では近年、水害を含めて災害が少なく、住民に危機意識が薄くなっているのが、防災意識を高め、いざ

* 1 中川町、音威子府村、美深町、名寄市、士別市、下川町、剣淵町、和寒町。

というときの連携がうまくいくよう勉強しています。最近は異常気象で天塩川流域でも浸水することがありますから、実際に起きたらどうす



るのか、河川事務所と連携して危機管理の体制を考えています。

真砂 井上さんは大災害の記憶がありますか。

井上 水害や災害を実際に体験したことはありませんが、昭和30年ごろに名寄で災害があり、死者が出たこと、昭和50年に稚内で国道が通行止めになったことは聞いています。体験がないので危機意識が不足しているわけです。

私たちの具体的な活動は、実際の水防訓練でもそういう役割ですが、巡視して歩き、危険箇所を河川事務所に連絡することです。

真砂 自然災害の場合は、情報をいかに早く伝えるかがすごく大事になってきますね。実際、今までは行政任せと思いますが、自分たちが主体でやってみて、何か気づかれたことはありますか。

井上 大雨で水量が増えたときにも、子供たちは知らないで遊びに行きます。広大な河川で、管理者だけですべてをみるのは大変な労力と時間がかかりますから、なかなかできません。地域の住民が連携・協力して行くと、迅速に危険箇所がわかり、子供たちが行かないように注意できます。その態勢をとれるよう、情報収集と伝達するための勉強会を継続する必要性を感じました。

真砂 教育にもつながるお話ですね。確かに、知らないと怖くないから、近くに寄ったり、最悪の場合、命を落としたりすることもあると思います。自然への畏怖（いふ）を感じることは、自然を大事に思う気持ちにつながるかもしれませんね。

今なさっている活動と井上さんが今までやってこられた経験を通して、今後、社会資本整備はどうあるべきだとお考えですか。

井上 今の天塩川の治水、環境などの社会資本がどのレベルなのか、他の河川と比べて優れているのか、不足しているのか、なかなか私たちの感覚ではわかりません。その点は情報をもらいながら、自分たちも勉強しなければならないと思います。

社会資本整備は、災害が起きてからするのではなくて、できれば災害を予知して行えば、大きな被害は出ないと思います。最近は特に、異常気象による災害が北海道の安心を脅かしている気がしますので、予防対策をして、そのあたりの地域の意見も十分聞いてほしいと思います。

行政とのパートナーシップ

真砂 防災対策で行政とタッグを組むというお話でしたが、最近は官民協働とか、パートナーシップということがよくいわれます。このようなことについて、井上さんはどう思われますか。

井上 今年、河川事務所と協働で水質調査を2回しました。単に水の数値を知るだけではなくて、実際に見て、においをかい



で、さわってみて、この河川が環境的にいいのか悪いのかを肌で感じてもらおうと思いました。こういう協働作業から住民として地域の自然環境や観光資源の中心であり、まちづくりの象徴である川を将来どうしていかなければならないのかを感じてもらえればと思っています。

真砂 先日は清流日本一の尻別川へ行きましたが、やはり、天塩川も水質の調査は、気になるものですか。

井上 水質は前日の雨の状況や天候でずいぶん変わります。私は全国水環境マップ実行委員会で状況を見ていますが、都会の方は危機意識が強く、調査カ所も参加する人も多いですね。リバーネットも入っていますが、地域住民の意識はあまり水質で張り合う気持ちもなく、安心していています。昭和30年ごろ、名寄川では凍った雪を冷凍庫がわりに、川の氷を夏にはアイスキャンデーやかき氷にするぐらいきれいな川で、名寄川の氷が1年中使われていたそうです。

天塩川の魅力再発見

真砂 天塩川の四季を通じた魅力の発掘や発信にかかわる活動についてお話いただけますか。

井上 冬はスキー、春は「名寄タイムバトル」、夏は「ひまわり祭り」、カヌーですね。また、天塩川リバーネットでは、「天塩川を語る集い」を開催して、地域のご年配の方々に開拓の歴史や苦労話、川とどうかかわり、遊んだのかなどを語っていただき、勉強し直す機会をつくっています。

真砂 名寄タイムバトルでは、何のタイムを競うのですか。

井上 天塩川支流の名寄川の解氷日時を当てるイベントです。カナダですごく人気があって。流域では名寄市と中川町でやっています。天塩川は中川、音威子府で必ず凍りますから、春を告げるイベントです。

真砂 このような地域の魅力を発信する仕事をされていて一番うれしいことは何ですか。

井上 やっぱり、来た人が喜んでくれる顔を見ることが一番ですね。ひまわり祭では私もずっと畑にいますから、「稚内に寄るのですか」と聞くと「名寄が一番北限だ」と道外からひまわりだけを見にわざわざ来る人もいて、非常に感動します。

真砂 ひまわり祭りは20年前から、一朝一夕ではありませんね。天塩川リバーネットはまだ2年ですから、まだこれからいろいろな方が来て、喜ばれる方が増えていくという夢がありますね。カヌーや「天塩川を語る集い」での活動はいかがですか。

井上 天塩川は他の河川に比べて障害物が少なく、長距離をカヌーで下れたり、サケが遡上してきたり、いろんな魚介類が見られ、自然と遊べる川です。川を巡視して河川管理者に報告する巡視活動もカヌーでするわけですが、楽しい遊びと防災にも役立つ天塩川の観光資源です。



松浦武四郎、天塩川探検150年記念

井上 天塩川の歴史再発見のため、松浦武四郎の宿営地を河口から上流まで全部見て歩き、いかに長い川か再認識しました。地域ごとに文化も気候も違います。みんなで宿営地を視察しながら勉強した中で、アイヌの人たちの漁に使った“テッシ”という岩の固まりがまだ残っていて感動しました。それから、アイヌの人たちが冬に食べる“アイヌなべ”という、干した草木類とシャケを入れたなべを何とか地元で復活したいという話があります。

真砂 河口から川上まで歩いたのですか。

井上 今年9月30日に天塩川リバーネットのメンバーと河川事務



所を含めた20人がバスで2日かけて歩きました。

真砂 それは大変でしたね。武四郎が残した記録がたくさんあるというのは利点ですね。活用しない手はないです。私も、アイヌなべを食べてみたい。

井上 今回、宿営地を調査して、ある程度宿営場所がわかりました。そこで、河川事務所に「宿営地」という看板を設置してほしいと要望しています。また、松浦武四郎が天塩川探検をして来年(平成19年)は150年目にあたることから、記念事業をしたいと思っています。6月に三重県の松浦武四郎記念館の館長を名寄へ呼んで、名寄の北国博物館で150年記念パネル展や式典を計画しています。

真砂 そのアイデアは民間から出て、それを実現する手助けを行政がしているのですね。私は武四郎をテーマにした番組に、1年間出演したことがあり、三重県の松浦武四郎記念館や生家にも取材に行きました。生家は、伊勢神宮の参道沿いにあり、武四郎は、全国からお伊勢参りに集まる人たちの様子を小さな頃から眺めていたようです。そのような中で育ち、好奇心を大いに刺激され、成長し自らも全国津々浦々を探検しましたが、中でも北海道には強い思い入れがあったそうです。未開の大地が魅力だったらしいのです。もう一つは、地元の人の人情、優しい心配りのアイヌの人たちに変にお世話になったようです。「北海道命名の地」という木碑が音威子府町の天塩川沿いにあります。武四郎がアイヌの長老とお話したときに、「自分が“カイナ”と呼ばれるのはなぜだ」と聞

いて「カイ」は“この地域の者”を意味するアイヌ語で、敬称の“ナ”を付けて“カイナ”というのだよ」と教えられ明治政府の要請による蝦夷地命名で、その「カイ」を取り入れた名前を候補にあげたこと、しかも、北海道の始まりは天塩川沿いだったということを初めて知り、道民として、すごく感動しました。

井上さんは天塩川沿いの歴史に小さいときから関心を持っていましたか。



井上 関心はありましたが、知る機会はありませんでした。小さいころは川で泳いで、ウグイやカジカ釣りをして遊びましたが、今の子供たちは、プールもあるし、

高速の交通手段があって遠くまで行けますから、近くの川で遊ぶ機会は逆に少ないですね。

真砂 自分の子供のころに川から何かを得たという経験を今の子供たちにも実感してほしいのですね。

井上 そうですね。川は自然の象徴ですね、水を見ると、のんびりできて、すごく和やかになります。心豊かに育つには、山や川の自然に親しむことが必要ではないかと思います。

一步一步確実に、できることを長く続ける

真砂 子供のころはわからないですが、大人になってから気づくのでしょうか。そこで育ち、今はいろんな取り組みで、地域の歴史や文化を発掘されていますが、それによって地域に対する思いは変わりましたか。

井上 天塩川は北海道遺産に選ばれました。そのときに出した結論は、「特別なことはしなくていいのでないか」ということです。いつもどおりの、できる範囲のことを確実に一步一步みんなで長く続ける。それが天塩川にかかわる私たちの役割だということです。

真砂 この活動を通して、地域が、北海道がどう変わっていったほしいか。井上さんたちが目標にされているビジョン。地元のためにいろいろな取り組みをされて、たくさんの方の笑顔を生で見てこられた井上さんの夢や、抱負。将来はどんなことをしていきたいと思われませんか。

井上 私の仕事柄、天塩川を核とした観光ですから、やはり手に触れてもらいたいと思うのが“土”です。年配の人でも小さい子供でも、土をいじる

と自然を感じられると思います。都会には土をいじるような環境がありません。そういう意味で、土をいじれるような取り組み、ひまわり畑でひまわりを刈り取ったり、ジャガイモを掘って持ち帰ってもらったり、いろいろな食べ物の収穫体験をしてもらい、「食料基地」としての北海道のすばらしさを伝えたいというのが一番です。

また、天塩川に残っているアイヌ文化の“テッシ^{やな}(築:魚を取るための仕掛け)”とか“チャシ(砦:採取のための見張り場)”を紹介したり、地域の歴史を語り伝えるような名物人間を育てて、観光客に説明できるようなガイドを養成することが目標です。

真砂 治水と利水は別ものだと思っていたのですが、川を知ることを通して、それが利水につながったり、防災につながったりする。川をよく知るという取り組みそのものが、川を活用することにもなり、そのような意味ではあまり限定せずに地元のことをよく知る姿勢が大事なのだと、井上さんのお話を聞いて思いました。



天塩川流域が観光客がいっぱい集まる、すてきな場所になるといいですね。ひまわり祭りのように20年かかるかもしれませんが、そんな息の長い取り組みをぜひこれからも続けていただければと思います。どうもありがとうございました。

(本インタビューは、平成18年11月13日に名寄市のなよろ観光まちづくり協会で行いました)

profile

井上 幸人 いのうえ さちと

1959年名寄生まれ。'82年大学卒業後、名寄商工会議所に入所。同所より派遣にて、2002年創設のNPO法人なよろ観光まちづくり協会事務局長に。なよろ観光まちづくり協会のほか、道北観光連盟・名寄市物産振興協会等の事務局長も兼ねる。また、'04年設立のNPO法人天塩川リバーネット21の事務局長に就任。ほか、全国水環境マップ実行委員会委員、天塩川流域委員会委員も務める。

真砂 徳子 まさこのりこ

埼玉県出身。明治大学文学部卒。新潟テレビ21アナウンサーを経て、北海道に移住。ニュース、バラエティ、情報・教養番組などテレビを中心に幅広く活躍。2005年独立し、真砂事務所を開設。